

日本の若きアーティスト、第二の故郷フランクフルトを活動の拠点とする

フランクフルト市内でも交通量の多い通りに面するブラウンハイム地区の小さなギャラリー。夕方のラッシュアワーにも関わらず、ギャラリー内は静かで落ち着いた雰囲気だ。奥では、日本人アーティストの青山祐功(たすく)氏と、ギャラリーオーナーの、インゴ・カステン・クノツケ氏が座って会話をしている。夕日が差し込んでいる部屋には、墨絵が展示されている。実際に、二人がお茶を飲みながらしている会話とは、この半年間、青山氏のドイツ語力をつけるためにクノツケ氏が定期的に行ってきたドイツ語レッスンである。

日本から見たフランクフルト

青山氏は、絵の制作をしながら作家として成長するために、2年前にここフランクフルトに足を踏み入れた。「フランクフルトは日本人にとってアートシーンで評価を得るためには打ってつけの場所だ」とオーナーのクノツケ氏は語る。「何かの分野で国際的にになりたいのであれば、この土地で活動することは不可欠だ。表現する場所がこのような小さなギャラリーであろうが、シュテーデル美術館のように大きな美術館であろうが、日本人にとってそれはそこまで重要なことではない。」

絵の制作活動は、青山氏にとって人生そのものである。「アートとは、僕そのものであり、作品の中で僕自身、また僕の抱く不安や恐れ、夢や希望を表現しています。」青山氏は日本人の奥さんと二人でフランクフルト市内に住んでいるが、その理由として「フランクフルトは高層ビルがたくさんあり、小さすぎるわけでもなく、大きすぎるわけでもなく、そういう点が故郷の名古屋を思い出させてくれる。」と語っている。

彼は、日本の美術大学を卒業し、絵画や彫刻などを梱包する会社で働いた後、海外へ出てきた。自身で決めた道へ飛び出したわけだが、家族や友達と別れることは、なかなか簡単な一歩ではなかったと述べている。こちらに来てからは、同年代のドイツ人とコミュニケーションをとることが大きな壁となったわけだが、フランクフルトにある仏教のお寺に通うことで、少しずつ地元の方々との関わりが持てるようになった。ドイツにそのようなお寺があったということも、彼がこちらへ来た理由のひとつだと述べている。

リアルなファンタジーと空想的ファンタジー

彼は、空想を描く。彼のリアルなファンタジーの世界が油絵で表現される。作品の中では、人物が断崖の上で綱渡りをしている。「前進するための一歩には、いつも不安と恐怖がついてまわるが、それでも進まなければならない。」と青山氏は作品のコンセプトをこう語る。それはまさに、今の彼の状況そのもののように思える。アートには、ドイツとつながりを持ち、言葉の壁を乗り越えるための手段という一面もあるということだ。グレーやブルートーンの作品に描かれる人物は、男性しかいないが、それについてこう語る。「女性の姿は、描くにはきれいです。それに、美しい女性が描かれることはよくありますが、男性が描かれることはそんなにないので。」彼とのコミュニケーションはそんな簡単なことではなく、彼がひとつの文を発言しては次に発する言葉を考えるとといった状況だった。考えている間は、ひげをゆっくりなで、言葉で補えない分は、紙に描いて説明したり、手元の電子辞書を見たりして、会話を進めていった。

一歩前へ

クノツケ氏が青山氏の活動を知ったのは、ケルンで行われた日本人アーティストのグループ展でのことだ。「その作品はどれもみな素晴らしかった。そこで、彼らの活動を彼らの身になって考えるようになった。」と述べている。クノツケ氏は、長い間日本の文化や芸術に興味があり、独日協会の会員である。青山氏との初めての仕事は、このブラウンハイムでの個展で、そこで公開制作も行われた。「僕がお屋にギャラリーの前を通った時、多くの日本人が彼の作品を見に来ていました。」とクノツケ氏は思い出しながら答える。ギャラリーオーナーの彼は、アートの世界では、自らがコンタクトを取っていくことがいかに重要かということを知っているので、現在彼は、そのための手伝いを青山氏にしている。「私は、彼がアート活動をこの地で続けていけるようその手助けをしたい。そしていつかその努力が実を結ぶよう願っています。彼は才能ある作家だと信じていますからね。」と語った。青山氏はつい数週間前に、フランクフルトの芸術協会に初の日本人として登録された。若い絵描きがフランクフルトで確立されるまでには時間がかかるかもしれない。しかし、今回彼は「一歩前へ踏み出す」ことができたのではないだろうか。作品の中に描いたあの男性のように。